



Data	2023-120
監督・脚本:	岩井俊二
出演:	アイナ・ジ・エンド／松村北斗／黒木華／広瀬すず／村上虹郎／松浦祐也／笠原秀幸／粗品 (霜降り明星)／矢山花／七尾旅人／ロバー ト・キャンベル／大塚愛／安藤裕子／江口洋介／吉瀬美智子／樋口真嗣／奥菜恵／浅田美代子／石井竜也／豊原功補／松本まりか／北村有起哉／武尊

みどころ

岩井俊二監督が歌の世界に造詣が深いことは、東日本大震災からの復興の“祈りの歌”として有名な『花は咲く』の作詞家であることから明らかだ。そんな彼が“ここ十年で一番の衝撃”だったという、歌手アイナ・ジ・エンドとの出会いによって、あれよあれよという間に本作が完成！

今の日本は円安で、経済的にも完全に中国に抜かれてしまったが、彼が『スワロウテイル』(96 年)を作り、彼が見出した歌手 Chara の『Swallowtail Butterfly ～あいノウタ～』を大ヒットさせた当時の日本はバブルの絶頂期、イケイケドンドンの時期だった。そのため、同作の舞台は円町 (エンタウン) だったのは懐かしい思い出だ。

同作は混沌とした世界が描かれた、ワケのわからない映画だったが、仙台出身で東日本大震災を体験した岩井監督が本作で紡いだストーリーは、舞台を移動させ、時期をずらしながら展開していくためわかりにくい、あくまでタイトルどおり、徹底的に「Kirie no Uta」を聴かせるものになっている。

そこで、問題は彼女のハスキーボイスが好きかどうかになり、それによって本作の評価が分かれるのは仕方ない。ちなみに、10 月 16 日には谷村新司死す！との報に接したが、私は彼や 2007 年に若くして亡くなった ZARD の坂井泉水の曲や歌詞の方が好き。それは単純に歌詞がわかりやすくメロディが美しいためだ。「Kirie・憐れみの讃歌」はしっかり歌詞を追いつつ聴けばいいのだろうが、劇中の歌だけではそれがわからないのが本作の大きな難点では？

■■■岩井俊二監督に注目！“衝撃の出会い”に注目！■■■

私は岩井俊二監督の『Love Letter』(95 年)も『リリイ・シュシュのすべて』(01 年)

も観ていないが、『花とアリス』(04年)、『シネマ 4』326頁)、『リップヴァンウィンクルの花嫁』(16年)、『シネマ 38』88頁)は観ており、両者とも星5つをつけている。また、映画評論を書き始める前に観た『スワロウテイル』(96年)が強く印象に残ったこと、そこで歌われていた Chara の『Swallowtail Butterfly ～あいのうた～』を北新地のカラオケで何回か歌ったことをよく覚えている。本作の存在を公開日たる10月13日(金)の夕刊ではじめて知り、新聞紙評を読む中で「こりや必見！」と考え、翌日10月14日に鑑賞することに。

『キリエのうた』と題された岩井俊二監督の最新作たる本作のパンフレットには、岩井俊二監督の「キリエの“うた”に辿り着くまで」と、Dialogue「『キリエのうた』ができるまでの日々と、これから。」があり、そこでは両者とも一致して“ここ十年で一番の衝撃”だったアイナ・ジ・エンドとの出会いが本作のはじまりだったことが書かれている。しかし、「アイナ・ジ・エンド」という名前の女性歌手は一体何者？

■Kyrie 役兼小塚路花役で主演！ほとんどの楽曲も制作！■

岩井俊二監督は『スワロウテイル』で歌手 Chara を見出し、同作の主題歌である『Swallowtail Butterfly ～あいのうた～』を大ヒットさせた。岩井俊二監督が音楽や作詞に造詣が深いことは、彼が東日本大震災からの復興の“祈りの歌”として有名な『花は咲く』の作詞家であることでも明らかだ。本作は、そんな岩井監督と歌手アイナ・ジ・エンドとの“偶然の出会い”によって生まれた奇跡の映画だ。本作のパンフレットは1500円と高価だが、そこでは、ストーリーの紹介欄が全くないからビックリ！そりゃ一体なぜ？もっとも、パンフレットには、本作キャストを紹介する見開き2ページの欄があるので、それをしっかり確認したい。

他方、本作のパンフレットには、主演を務める①潮見夏彦役の松村北斗、②寺石風美役の黒木華、③一条逸子(イッコ)兼広澤真緒里役の広瀬すずのコメント(挨拶)があるが、その前に小塚路花(Kyrie)兼小塚希役を務めたアイナ・ジ・エンドのコメント(挨拶)があるので、それに注目！そこでは、①岩井俊二監督との出会いと感謝、②はじめてのお芝居に臨む心境、そして、③楽曲を作り歌う時の心境、を“生の言葉”で語っている。その最後は“歩く音楽様のような存在の小林武史さん”に対して、「主題歌“キリエ・憐れみの讃歌”はとても大事で明るみに向かっていく心を持てる曲です。」と述べたうえ、「どうかあなたにキリエのうたが届きますように。それができたらもう、本当に幸せです。」と結んでいる。本作の鑑賞については、それらの言葉(挨拶)をしっかり受け止めたい。

■178分もの長尺になった理由は？なるほど、なるほど。■

本作が3時間の長尺になっている1つの理由は、『キリエのうた』というタイトルのとおり、路上ミュージシャンとして活躍するキリエ(アイナ・ジ・エンド)の歌声をタップリ聞かせるため。しかし、もう1つの理由は、3つの物語が複雑に描かれるためだ。

その第1は、2011年の東日本大震災当時の石巻における、幼少期の小塚路花(矢山花)

たち家族の物語と、その直前、2010年の石巻における高校生の潮見夏彦（松村北斗）と路花の姉・小塚希（キリエ）（アイナ・ジ・エンド）との出会いや、路花が夏彦に紹介される物語だ。なお、同じ2011年の大阪を舞台にした物語では、東日本大震災で姉と母・呼子（大塚愛）を失った路花が、姉のフィアンセ夏彦が大阪にいるらしいとの情報を頼りに、トラックの荷台に乗って一人大阪に辿り着き、そこで寺石風美（黒木華）に保護される物語も描かれる。

第2は、風美と夏彦の尽力にもかかわらず、行政のお役人たちが震災孤児の路花を施設に入れたり、帯広の里親を紹介した結果、路花が帯広の高校に入学し、夏彦と再会する物語。そして、第3は、東京でただ1人、Kyrieと名乗る路上ミュージシャンとして歌っていた路花を、同じく東京で結婚詐欺師をしていた（？）一条逸子（イッコ）（広瀬すず）が発見し、帯広の高校以来の再会で意気投合した2人が、歌手とマネージャーとして二人三脚の活動を開始していく物語だ。このように、舞台を石巻→大阪→帯広→東京と動かしながら展開していく3つの物語を描くために、たっぷり時間が必要なことは仕方ないだろう。

■□■舞台も時代も異なる3つの物語の展開は？キャストは？■□■

この3つの物語は複雑でややこしい。第1の物語で、幼少期の路花とお姉ちゃん、そして、その母親が東日本大震災が発生する中で体験する悲しい物語が描かれる。そして、第2の物語の前半では、まず幼少期の路花と、路花を保護する小学校教師の寺石風美が登場し、その後、風美からの連絡で路花を迎えに来た“お姉ちゃん”のフィアンセであった夏彦と風美が路花のために尽力する姿が描かれる。また、第2の物語の後半では、3代続けてスナックのママになるのを嫌だと考えながら、大学進学の意味もなく、自分の生き方に悩んでいる女子高生である広澤真緒里（広瀬すず）とその家庭教師に就任する夏彦の物語が描かれる。その物語には真緒里の母親・楠美役で奥菜恵が、祖母・明美役で浅田美代子が登場。また、夏彦の母親・真砂美役で吉瀬美智子が、夏彦の父・崇役で樋口真嗣が、夏彦の伯父・加寿彦役で江口洋介が登場する。

そして、第3の物語では、せっかく東京の大学に合格しながら大学にも進学せず、路上ミュージシャンとして1人で活動しているキリエこと路花と再会し、そのマネージャーに就任するイッコが大活躍！もっとも、ド派手な服装をし、一見豪邸に住んでいるように見えるイッコは、実は結婚詐欺を繰り返しているらしい。その被害者が横井啓治（石井竜也）やイッコの元恋人（豊原功補）だ。また、Kyrieの歌声が有名になるにつれて次々と登場してくるのが、路上ミュージシャン仲間の風琴（村上虹郎）や松坂珈琲（笠原秀幸）や御手洗礼（七尾旅人）たち、さらに、音楽プロデューサーの根岸凡（北村有起哉）やIT会社社長の波田目新平（松浦祐也）たちだ。

このように、パンフレットにストーリー紹介のない本作のストーリーは極めて複雑だから、要注意。舞台も時代も異なる3つの物語が、時間軸をずらしながら次々と進行していくうえ、矢山花が1人2役、アイナ・ジ・エンドも1人2役を演じているので要注意！よ

ほど用心しないと、ついていけないことになってしまう。

■□■この歌声に注目！話すのは？この声が好き？それとも？■□■

ある瞬間に、ある大きなショックを受けたことが原因で、突然しゃべれなくなってしまう。そんなことが現実にあることは知っていたが、大阪時代、1人で木の上で生活している女の子、路花の姿を見ると、それが本当だということがよくわかる。

他方、時間軸をずらした本作で、路上ミュージシャンの Kyrie が歌っている声を聞くと、ハスキーながらも力強い声にビックリ！つまり、震災孤児となった（少女時代の）路花は、歌は歌えるけれども、しゃべることはほとんどできなかったが、帯広における女子高生時代の路花も、東京で Kyrie と名乗って路上ミュージシャン活動をしている路花も、かすれ声ながら人との意思疎通は十分できるようになっているらしい。

しかして、路上ミュージシャンとして Kyrie が歌っている声の力強さにビックリ！これなら、いくら東京広しといえども、Kyrie の姿が、結婚詐欺師（？）として東京をふらついていたイッコの目に留まったのも当然だ。時間軸をずらして3つの物語が描かれるため、Kyrie の力強い歌声は本作導入部で聴くことができるので、まずはその歌声に注目！

もっとも、岩井俊二監督は本作ではじめて Kyrie 役を演じたアイナ・ジ・エンドの歌声を聴いた瞬間に衝撃を受けたそうだが、歌声の好き嫌い人はそれぞれだ。かつての森進一のかすれ声は男だからそれでいいが、青江三奈のハスキーボイスは嫌いな人も多いはずだ。それは歌手 Kyrie についても同じだから、本作の評価については Kyrie の歌声が好きなのは、岩井俊二監督と同じようにハマってしまうものの、そのハスキーボイスが嫌いな人は受け付けないうだ。私はどちらかというと、女性歌手については、ZARD のボーカルだった坂井泉水のような透き通った歌声の方が好きだが、比較的好みの幅が広いので、Kyrie の歌声も OK！

■□■谷村新司死す！kyrie との歌声比較、楽曲比較は？■□■

本作の評論を書いていた10月16日、突然、谷村新司の訃報が伝わってきた。彼は私と同世代、そして、「アリス」で共に活動をした堀内孝雄と共に大阪人で、私の知人を通じたちょっとした縁もあった。「アリス」として活動を始め、人気が沸騰し始めた時期と、1979年7月に私が独立した時期が重なっていたため、私の事務所に入所してきた新卒の女子学生からアリス人気の凄さを聞かされたことを今でもよく覚えている。私はアリスの楽曲よりも、谷村新司がソロで歌った楽曲の方が好きだった。彼は、山口百恵に提供して大ヒットした『秋桜』をはじめ、女性の視点で歌った曲が多かったから、女性歌手の曲を好んで歌う私は、彼のそんな“女うた”が大好きだった。そのため、『22歳』（83年）、『誕生日ーありふれた黄昏の街にてー』（84年）等、男性があまり歌わない歌を、私はカラオケでよく歌っていたものだ。私が谷村新司のソロの楽曲が好きなのは、ZARD の楽曲が好きなのと同じ理由。つまり、その歌詞がすごくわかりやすく、そしてメロディが美しいためだ。谷村新司最大のヒット曲は『昴ーすばるー』（80年）だが、この曲の“世界観”はあの歌

詞なればこそそのもの、そして、あの歌詞はまさに谷村新司なればこそそのものだ。

そんな私の“好み”からすると、本作ではじめて聴いた **Kyrie** の楽曲はすべて、ハスキー声のせいもあるが、歌詞がわかりにくいのが難点だ。ちなみに、**Kyrie** が音楽プロデューサー・根岸の要請によってテスト的に歌った『前髪あげたくない』も、劇中では歌詞が全くわからなかった。しかし、パンフレットに見開き 4 ページに渡って掲載されている「キリエの“うた”たち」を読むと、アイナ・ジ・エンドが同曲をどんな思いを込めて作ったのかがよくわかる。その歌詞とアイナ・ジ・エンドのコメントを引用すれば次の通りだ。

『前髪あげたくない』 作詞・作曲：アイナ・ジ・エンド

前髪はあげたくないの	いないいいないばあって目をあけたら
だって眉毛が変だから	きらりきらり笑ってくれるかな
そんなによく見ないでほしい	増える優しい記憶住みつく
変な顔してるの	今きっと大丈夫 大丈夫かな
くたびれた笑顔で	自信ないな
見つめてくれる あなたの指を	
確かめあってみたい	

Aina's comment

ルカはぱつん前髪ですが、お姉ちゃんの前髪は前髪を分けてて、ルカはずっとお姉ちゃんみたいな前髪に憧れてるんだけど、照れ屋だから恥ずかしくて前髪をあげられないんです。お姉ちゃんみたいになりたいけどなれやしないよ、自信ないな……っていう思春期のルカのイメージです。歌い方も、最初のほうはぼつぼつと歌うんだけど、気づいたらお姉ちゃんはもういないんだ、ってどんどん感情的に歌って、サビにいくにつれてギターのコードも大きくなっていきます。お姉ちゃんがいなくなったことを咀嚼できてない感覚を表現しました。

本作のラストは「新宿中央公園フェス」における、路上主義大音楽祭のシークエンスになる。その大音響に「近所から苦情が出た」として警察官が登場してきたのは、私の弁護士感覚からすれば当然のことだが、**Kyrie** をはじめとする路上ミュージシャンたちは「歌声よ響け、カオスな世界に！」のキャッチフレーズのとおりで、それを強行突破！？その是非は大問題だが、私にはそれ以上に、そこで **Kyrie** が大音量で歌う曲の歌詞が全くわからないのが大問題だ。それは、路上ミュージシャンとして **Kyrie** が 1 人で歌っている時も同じで、本作全編を通じて一貫している。そこで私の提案は、**Kyrie** が路上で歌う時はせめて歌詞を書いた大きな看板を立てたらどうだろうか？ということ。それくらいのサービスはすぐにできることだし、そうすれば路上で **Kyrie** の声を聴く観衆たちの、「**Kyrie** のうた」への理解と共感がより高まるのでは？

2023（令和 5）年 10 月 19 日記